

わたしたちの地域学習

沖縄・読谷村喜名小

《4》



豆腐や野菜などを混ぜて炒める料理にちなみ、「チャンプルー文化」とも呼ばれる沖縄の文化。琉球王国時代に中国や日本、朝鮮、東南アジア諸国との交易を通じて多種多様な文化を融合し成熟した。独自の文化、歴史の学習に、新聞はどう活用されているのか。行事をきっかけにした事例を取材した。
(那須政治)

琉球文化 大会きっかけに壁新聞

一月下旬、読谷村喜名小で五年生八十人が、総合学習の時間に自作の壁新聞を解説した。「ブラジルには十六万九千人のウチナンチュ移民がいます」「棒術、三線、(沖縄)

児童は、一八九九年に始まった沖縄県出身の移民の歩み



沖縄にルーツのある移民の歴史や世界に広がる琉球文化などを新聞にまとめた5年児童ら＝沖縄県読谷村喜名小で

や、世界に根付いた沖縄文化を一年かけて学んだ。この日は総まとめた。

県の海外への移民数は戦前が約七万二千人、戦後(一九九三年まで)で一万余七千人超といずれも全国トップクラス。より広い農地の獲得が主な理由だ。子孫も含め、沖縄にルーツを持つ人は世界中に

世界への広がり知る

た。

四十万人以上いるとされる。学習のきっかけは、昨年十月末にあった五年に一度の交流行事「第六回世界のウチナンチュ大会」だ。移民やその家族ら約七千三百人を県内に招き、歌い、踊り、語り合

って絆を深めた。喜名小では、昨年七月に南米の青年団、十一月にポリビアの中学生を招待。児童は、彼らの三線演奏が自分たちよりうまいことに驚いた。今年一月の学芸会では、県移民の多いブラジルや米ハワイの踊

「世界のウチナンチュ大会」に合わせて昨年11月に喜名小を訪問したポリビア人中学生。みな沖縄にルーツを持つ(喜名小提供)



沖縄本島中部の西海岸に位置し、約4万1000人の人口は全国の村で最多。伝統民芸品で「やちむん」と呼ばれる焼き物の窯元が集中する。1945年4月1日にあった米軍による本島上陸は、村内の比謝川河口付近を中心に展開された。近くに碑がある。

り、海外で受け継がれる三線、空手なども実演した。一連の学びには、「琉球新報」「沖縄タイムス」の地元二紙の移民報道も活用した。松田知彦教諭(三線)は、移民の歴史や、異国での苦悩が描かれた記事などを随所で紹介。沖縄で「ゆいまーる」と呼ばれる助け合い精神も読み解いた。

大会まで一カ月を切った昨年十月初めから関連記事が増え始め、照屋翔己君は「大会の話題が多く、ウチナンチュのことをもっと知りたいと思った」と話す。まとめに新聞作りを選んだのは、「得た知識をグループで共有し、読む人のことを考えて分かりやすくまとめる必要があるから」と松田教諭。久高小桃さんは「どの国にウチナンチュが何人いるかなどを調べるのが大変だったけ

た。古謝さんは、大会間際の児童の姿勢の変化が印象に残る。家庭や学校で新聞を読む子が自然に増え、「今日も世界のウチナンチュが新聞に載ってたね」と声をかけてくる子もいた。新聞は情報源の一つという意識で、NIEを前面に押し出したわけではない。「沖縄の良さを知ったことはもちろん、与えられずとも自ら学ぶ姿勢を見せた児童がいたのも収穫でした」と児童らをたたえた。

時代の証人スケッチ写真

季節の変わり目や、ニュースがない日に、若い記者は支局長やデスクから一スケッチ写真を撮ってこいとよく言われます。

服装や髪形が写っていることで、将来、この写真が時代の「証人」になりますし、過去に写した写真ではありませんよ、という証明にもなるからです。



新聞とわたし

五年生の四月から毎日「情報ノート」に取り組んでいます。記事を一つ選んでA4用紙に貼り、自分の考えを書いたり前文を書き写したりします。授業で作ったのをきっかけに続けています。ひもでとじていて厚さは三十枚を超えました。

好きな記事で「情報ノート」作る

好きな記事は飛行機や電車などの乗り物関係。最近ではJR西日本が運行する豪華寝台列車「瑞風」が気になりました。車内にバスタブがあり、水がこぼれない対策がしてあるそうです。一面や社会面をよく読むので、プレミアムフライデーやトランプ米大統領などの記事も選びました。新聞の好きなところは残せること。「一年前にはこんなことがあったな」と読み返すのが楽しいです。(名古屋市 東山小五年)



橋本泰成君

NIE全国大会名古屋大会は、8月3、4日に名古屋市で開かれます。

